

麻疹について



麻疹とは、「はしか」とも呼ばれ、非常に強い感染力を持つ麻疹ウイルスの感染によって起こり、主に1～5歳の子どもの中で流行する急性ウイルス感染症です。しかし、最近では高校生くらいから20代以上の感染も増え、大人になってから麻疹に感染すると重症化しやすいといわれ注意が必要です。妊娠中の女性では、早産や流産に至った例も報告されています。

麻疹は、麻疹に感染した人の咳やくしゃみなどで麻疹ウイルスが飛び散り、それを吸い込むことにより感染します。免疫を持っていないと、90%以上が発症しますが、一度感染すると、ほぼ一生免疫が保持されます。通常、1～2週間の潜伏期を経た後に38℃前後の発熱や咳、鼻水といった風邪の症状で発症し、一旦解熱した後、半日ほどで再び39～40℃台の高熱と共に赤い発疹が体全体に広がっていきます。最初の発熱が出てから2～3日目頃から、口の中の頬の裏側の粘膜に、周りが赤く中心が白い「コプリック斑」という粘膜疹が現れ、全身の発疹が出る頃には消えていきます。麻疹の初期症状は風邪に似ているため、診断がつきにくいのですが、この「コプリック斑」が確認できれば、麻疹の診断がつかます。また、麻疹に引き続いて、中耳炎や肺炎、脳炎を合併する場合が多いのも特徴です。

麻疹に感染した場合、特別な治療法はなく、対症療法が中心になります。唯一の予防法は、麻疹ワクチンを接種することです。(麻疹・風しん混合ワクチンもしくは、麻疹単抗原ワクチンの接種) ワクチン接種による抗体獲得率は95%以上といわれています。しかし、日本の接種率は、約70%と先進国の中では極めて低いのが現状です。また、ワクチンの効果は、一生続くものではなく、徐々に低下していきます。そのため、追加接種を行い、抗体価の再上昇(ブースター効果)を図る必要があります。WHO(世界保健機関)では、日本を含む西太平洋地域において、2012年までに麻疹を排除するという目標を定めています。これを受けて日本では、2006年4月以降に1回目(第1期)の接種を受ける幼児からは、就学直前に2回目(第2期)を受けるように予防接種法が改正されています。また、10代の若年層を中心に成人麻疹が急増しているのを受け、2008年4月から5年間の時限措置として、中学校1年生(第3期)と高校3年生(第4期)を対象に麻疹・風しん混合ワクチンの接種を行うことになり、今年度がその最終年度になります。

皆野町では、今年度、保育所・幼稚園年長クラスに相当する幼児(5歳～7歳未満で小学校就学前1年間の幼児)と高校3年生に相当する年齢の方に個別通知を出しています。中学校1年生に相当する年齢の方は、基本的には中学校で集団接種になりますので、後日、お知らせします。

定められた期間を過ぎた場合は、任意接種となり、接種費用は全て自己負担となりますので、ご注意ください。

平成24年度 麻疹・風しん混合ワクチン定期予防接種対象者

第1期：1歳児

第2期：保育所・幼稚園年長クラスに相当する幼児(5歳～7歳未満で小学校就学前1年間の幼児)

第3期：中学校1年生に相当する年齢の方(今年度13歳になる方)

第4期：高校3年生に相当する年齢の方(今年度18歳になる方)

(第2・3・4期の接種対象期間は平成24年4月1日～平成25年3月31日の1年間です)